

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330050

研究課題名(和文) 中国外交150年の長期分析 19世紀以来の連続・変容過程の再検討

研究課題名(英文) Long-run Analysis for 150 Years of Chinese Diplomacy: Reexamination of the Continuity and the Transformation Process since the 19th Century

研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA, Shin)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：90301861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円、(間接経費) 3,780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀から現在にいたる中国の外交について、外交史研究者と現代外交研究者が共同チームを組織し、既存の時期区分を批判的に検証した上で、その連続性と変容過程を、実証研究を踏まえて検討し、中国外交の通史的枠組みを提示することを目的として組織された。研究の結果、日清戦争後の10数年と1949年前後の変容とともに、20世紀を通底する要素として主権の重視が指摘された。20世紀初頭に形成された主権概念は、中華人民共和国にも継承される重要な要素であるが、それが如何に形成され、いかに変容したのかという点については、まだ研究が十分でないことも確認された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to explore a comprehensive historical framework of modern Chinese & PRC diplomacy. In order to advance this research, we have organized a collaborative team of researchers (specialized to modern diplomacy and PRC diplomatic history) of Chinese diplomacy from the 19th century to the present, and verified critically the preceding divided discourse and narratives of Chinese diplomacy before and after 1949. Additionally, we examined the continuous factor thorough modern and contemporary Chinese diplomacy on the process of this research. This research highlights the importance of "Sovereignty" as an element of underlying the 20th century with the transformation of 10 years after the Sino-Japanese War and around 1949. "Sovereignty" concept formed in the early 20th century in China is an important element that is also inherited by PRC. However, we also confirmed that the research how it was formed and about what has transformed is not sufficient.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：中国外交史 歴史と現代研究 中国外交文書 中国の主権概念 連続と断絶 中国の外交官 条約の継承 革命外交

## 1. 研究開始当初の背景

中国の外交は、歴史研究と現代研究が別個におこなわれてきた。そこでは、1949年の「革命」前後で大きな断絶があることを前提とし、現代では1978(1982)年前後、歴史では1911年の辛亥革命、1920年代の国民革命などの、一般的な歴史叙述の分岐点を外交史にも当てはめられるのが普通であった。現代研究と歴史研究の対話も決して活発とは言えない状況であった。たとえば、岡部達味「中国外交の古典的性格」(『外交フォーラム』100号、1996年)のように現代外交が“歴史”や“古典”に言及する際には、冊封・朝貢の時代のことや、中国的文化なるものが、ひとつの説明要因とされることがあるが、歴史学者は実証性のないその言論に否定的であった。また歴史学者の側は、J.K.Fairbankらの中国的世界秩序(Chinese World Order)と近代条約システムの19世紀における衝突と葛藤をめぐる議論が、中国が独自の秩序観を有しているのではなく、国際秩序とも親和性を有することを暗示せんとしたものであることが知られていることなど、現代外交との関連性を意識しないわけではないが、あくまでも「暗示」に過ぎず、現代外交研究者から参照される外交史研究は決して多くなかった。これは、坂野正高、衛藤瀋吉においても共通であった。1980年代から90年代初頭にかけて、濱下武志によって、アジア経済圏論に関連付けられた朝貢観が提起された、また革命史への問題提起などが外交史にも影響を与えて、革命を転換点とする外交史の叙述にも疑義が呈された。だが、これらの中国外交史における議論が中国外交研究に十分に関連付けられたわけではない。

1990年代半ばから現代中国外交および中国外交史研究は、大きな転換点を迎えた。現代中国外交研究は、台頭する中国、また中国ナショナリズムをいかにとらえるかという問題に直面し、中国外交は理想主義的か、現実主義的かという論点だけではない、多くの論点が提示された。また、ソ連の外交文書などが公開され、中国でも回想録などが多く刊行されるなど、牛軍、沈志華らによって実証研究の水準が向上した。21世紀に入って中国外交部が1949年以後の外交文書を公開し始めたこともこのような潮流に拍車をかけた。外交史の面では、1990年代から大量の外交文書が台湾や中国で公開されたため、唐啓華や川島真により実証研究が進められ、清末期から中華民国期の外交の連続性が指摘されるようになり、1911年の辛亥前後や1920年半ばの革命論的な外交史の叙述は修正された。しかし、現代中国研究と外交史研究の間の対話の問題や、叙述をめぐる連続・非連続の問題は1949年を分水嶺として残存し、また歴史の面でも茂木敏夫や岡本隆司によって19

世紀の中国外交史研究が進められ、逆に日清戦争期前後での分断が示唆されるようになってきた。他方、経済史や社会史、そして政治史の分野では1949年前後の連続性をめぐる議論が盛んになされるようになり、外交史でもKirby William C, “The Internationalization of China: Foreign Relations at Home and Abroad in Republican Era”, *The China Quarterly*, 150, 1997.のように、現代中国外交を強く意識した歴史研究があらわれてきた。世界の大国としての中国を歴史的に位置づけなおそうという試みであった。このような内外の風潮を受けて2009年に刊行されたのが、川島真・毛里和子『グローバル中国への道程 外交150年』(岩波書店)である。これは現代外交と中国外交史の接合をめざしたものである。だが、1949年前後の変容を受け入れつつ、暫定的に主権・独立などの面での連続性を指摘しただけであり、19-20世紀の世紀交代期の変容については十分な回答を与えていない。すなわち、依然として連続・非連続の問題は解決されずに残されている。

そこで、19世紀末を研究する岡本隆司・茂木敏夫、20世紀前半を研究する川島真、そして現代中国外交研究をリードする青山瑠妙とともに、中国外交150年を俯瞰して、その連続性と変容の双方を再検討したいと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、19世紀から現在にいたる中国の外交について、外交史研究者と現代外交研究者が共同チームを組織し、既存の時期区分を批判的に検証した上で、その連続性と変容過程を、実証研究を踏まえて検討し、中国外交の通史的枠組みを提示することを目的とする。これにより、従来の建国神話や安易な伝統論(政治文化論)に絡められた言説を批判的に検討し、今後の研究のための議論枠組みを提示できるだけでなく、他分野からも関心の高まる中国外交について、対話可能な論点を提供できる。具体的には、第一に従来転換点とされた時期区分を批判的に検証し、第二に組織・人事・思想・政策等の面での長期的な連続、変容過程を実証的に示し、第三に、既存の言説の形成過程を検討する。研究成果は主権をめぐる問題を検討してから公刊することを期したい。

## 3. 研究の方法

(1)本研究の4名の分担者が、19世紀から1910年代、1910年代から40年代、1940年代以後と担当を分けつつ、それぞれ相互に乗り入れながら、人事的考察 制度的考察 思想・理念的考察 政策課題・政策決定 言説の変遷について下記分担表を目安に個

別研究をおこなう。

	人事	制度	思想	政策	言説	検討する分岐点
分野別責任者	川	岡	茂	青	茂	
19c-1910s (岡)	岡	岡	茂・岡	岡・川	茂・川	1901年(北京議定書)、1911年(辛亥革命)
1910s-1940s (川)	川	岡・川	茂・川	岡・川	茂・川	1928年(国民革命/南京国民政府)
1940s-(青)	青・川	青・岡	青・茂	青・川	青・茂	1949年(人民政府)、1978年(改革開放)

川=川島、青=青山、岡=岡本、茂=茂木

また、初年度は、従来歴史の転換点とされた時期について、時期別チームで実証的に再検討しつつ、まずは外交史と現代研究との間の対話をおこない、研究会などを開催しつつ実証研究を進め、再検討する。次年度には、主にそれぞれの分野で変容過程や連続性について実証的に検討し、研究会などを通じて議論を深め、対外発信しつつ、個々の分野で連続性や変容過程について仮説を提示する。それをたたき台として第三年度には議論を深め、仮説を統合し批判的に補強しつつ、シンポジウムの開催などにより問題提起をおこなうことを、当初の研究方法与想定し、実際には以下のように進めた。

(2) 初年度は現代中国(現代東アジア)と近代中国(近代東アジア史)の間の断層面を探り、課題の共有をはかりつつ分担者がそれぞれの課題に取り組んだ。

中国外交史の連続と変容に関して、19世紀後半、また1978年以後については本科研メンバーにより一定の成果があることを確認したが、20世紀初頭前後、1949年前後については未だに議論が十分に尽くされているとは言い難く、また制度面での考察も課題として残されていると考え、こうした問題を克服すべく、本科研の研究会である東アジア国際関係史研究会を2回開催するなどして、現代中国(現代東アジア)と近代中国(近代東アジア史)の接合面を探ろうと試みた。

(3) 第二年度は従来、中国外交史の叙述上の分岐点とされた日清戦争から義和団事件前後の時期、また1927/28年、あるいは1949年前後などについて、制度、思想、言説、政策、交渉などの多様な側面から分析し、通史的に連続と変容の大枠を捉えることとした。このほか、制度や言説の分野における既存の外交“通史”の描かれ方を再度検証し、それぞれが何に依拠して時期区分をおこなったのか、いかなる事象に注目しているかということを示し、中国外交史の時代区分の根拠を再検討した。また、ワークショップや東アジア国際関係史研究会を3度にわたって開催

した。

(4) 最終年度には、引き続き東アジア国際関係史研究会を開催しつつ、前年度までに確認した現代中国(現代東アジア)と近代中国(近代東アジア史)の間に断層面が生まれた背景とともに、一貫性、連続性の所在についての検討をおこなった。

#### 4. 研究成果

(1) 初年度はまず、川島真「未完の「近代」外交 中国の対外政策の通奏低音」(『現代中国』)は、その連続性と変容について一つの枠組みを示した。19世紀後半については、岡本隆司の『李鴻章』(岩波書店)、また1949年以後、とりわけ1978年以後については川島真のThe Development of the Debate Over "Hiding One's Talents and Biding One's Time"(taoguan yanghui): China's foreign-policy doctrine が外交思想や言説を、青山瑠妙「中国「アジア一体化」の戦略と実像」が地政学的な空間論を提示した。また、第1回東アジア国際関係史研究会として林志宏「対支文化事業」中の學術調査以橋川時雄を中心(『対支文化事業』における學術調査 橋川時雄を中心に)(2011年11月23日、コメント・岩谷将)第2回として劉建平「中華人民共和国建国前後の中国共産党の対日政策」(2012年1月11日、コメント・杉浦康之)を開催し、本研究課題について本科研メンバーを超えて共有し、議論を展開した。

(2) 第二年度は、2012年6月10日にワークショップ「東アジア近現代史の連続・断絶、可能性」を開催し、戦後台湾のWHO加盟問題など、中国史や台湾史における歴史の連続性と断絶性、そこに見える可能性について議論した。また、東アジア国際関係史研究会を3度にわたって開催した。第3回研究会(5月8日)では、鄭成「地域レベルから見た国共内戦期の中共とソ連の協力関係 旅順・大連を中心に」(コメント:劉建輝・青山瑠妙)で国共内戦期の新たな“外交”を議論し、第4回では、張鳴「曹汝霖、章宗祥、陸宗輿是如何被制造成売国賊的?」(12月4日)で中国近現代史に通底する人物評価問題を討論し、第5回では王文隆「中国国民党党史館的現況与未来」(2013年1月15日、コメント・深町英夫)では台湾での国民党史、党文書の状況を討論した。さらに、川島が19世紀後半の中国における国際法受容の問題を以後の展開を視野に入れた研究を進め(“Historical Dialogue and Documentary Research”)、また研究分担者の岡本が現在も視野に入れつつ、中国での主権概念の形成を描く(「主権」の形成 20世紀初頭の中国とチベット・モンゴル )など、個別の成果を生み出した。

(3) 最終年度は引き続き、19世紀から現代まで各時代を網羅する課題について、それぞれ個別の成果をあげた(青山『中国のアジア外交』、岡本『近代中国史』、川島「思想としての対中外交——外交の現場から見る蒋介石・中華民国・台湾」、茂木敏夫「伝統的秩序をどう踏まえるか——東アジア新秩序の構想をめぐって」など)。東アジア国際関係史研究会は第6回呉景平「汪精衛研究的前景」(2013年5月21日)を開催し、第7回はワークショップとして「進展する戦後日台関係史研究」をテーマに議論を深めた(陳冠任「萌動、遞嬗與突破：中華民國漁權發展史(1912-1982)」、任天豪「台灣外交部檔案裡的東海問題」、徐浚馨「冷戦シンクタンクから学術センターへ：国立政治大学国際関係研究センターの変遷」(7月2日、コメント・石井明、清水麗))。また、これまで進めてきた現代中国(現代東アジア)と近代中国(近代東アジア)の間の断層面を探る過程で、主権の重視など一定の一貫性は見られるものの、それは20世紀初頭に掲げられたものであり、対外政策面では日清戦争後、1949年前後に大きな断層面があることが意識されるようになった。そして、本研究の成果として20世紀初頭の主権概念の形成の重要性が指摘され、これが中華人民共和国にも継承される重要な要素である可能性が確認された。さらにこれについては新たな共同研究をおこなう必要性を確認した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計26件)

KAWASHIMA Shin, The Origins of the Senkaku/Diaoyu Islands Issue: The period before normalization of diplomatic relations between Japan and China in 1972, *Asia-Pacific Review*, 査読有, Vol.20 No.2, 2013, 122-146

AOYAMA Rumi, Sino-Japanese Relations: Rivals or Partners in Regional Cooperations?, Chapter 9: China, Niklas Swanstrom & Ryosei Kokubun, *Japan and Asian Regional Integration: From Bilateral to Multilateral?*, World Scientific, 査読無, 2013, 145-165

川島真, 思想としての対中外交——外交の現場から見る蒋介石・中華民国・台湾、酒井哲哉編『日本の外交 第三巻 外交思想』岩波書店、査読無、2013、257-280

川島真, 産経新聞『蒋介石秘録』の価値—『日記』の引用とオリジナリティーをめぐる再検討、山田辰雄・松重充浩編著『蒋介石研究——政治・戦争・日本』東方書店、

査読無、2013、119-151

川島真, 対日新思考から10年——変化と継承、外交、査読無、21巻、2013、33-41

川島真, 近代中国的型塑與『伝統』——以対冊封朝貢之解釈为中心、吳淑鳳・薛月順・張世瑛編『近代国家的型塑——中華民國建国一百年国際学術討論会論文集』上冊(国史館)、査読無、2013、69-82

川島真, 蒋介石の日本経験——以高田時代為主、陳紅民主編『中外学者論蒋介石——蒋介石与近代中国国際学術研討会論文集』浙江大学出版社、査読無、2013、197-215

川島真, 第二革命之後亡命日本の革命家——以蒋介石為主、黃自進・潘光哲主編『蒋介石與現代中国的形塑』第一冊(領袖的淬鍊)中央研究院近代史研究所、査読無、2013、39-56

青山瑠妙, 中国外交における国際協調の流れ——中国とスーダンの関係を中心に、国分良成・小嶋華津子編『現代中国政治外交の原点』慶應義塾大学出版会、査読無、2013、369-392

岡本隆司, 「反日」と「排日」——先人に見る中国問題、東亜、査読無、547号、2013、22-30

岡本隆司, 内藤湖南「支那論」のすごさ、文藝春秋、査読無、91巻13号、2013、356-363

茂木敏夫, 伝統的秩序をどう踏まえるか——東アジア新秩序の構想をめぐって、国際問題、査読無、No.623、2013、42-52

[http://www2.jiia.or.jp/kokusaimondai\\_archive/2010/2013-07\\_005.pdf?noprint](http://www2.jiia.or.jp/kokusaimondai_archive/2010/2013-07_005.pdf?noprint)

茂木敏夫, 『海国図志』成立の背景——十八-十九世紀中国の社会変動と経世論、東京女子大学紀要論集、査読無、64巻1号、2013、87-102

KAWASHIMA Shin, Chap.19: China in Bardo Fassbender & Anne Peters eds., *The Oxford Handbook of History of International Law*, Oxford University Press, 査読有, 2012, 174-451

KAWASHIMA Shin, Historical Dialogue and Documentary Research, in Daqing Yang, Jie Liu, Hiroshi Mitani and Andrew Gordon, eds., *Toward a History Beyond Borders: Contentious Issues in Sino-Japanese Relations*, Harvard University Press, 査読有, 2012, 53-80

川島真, 長崎から見た辛亥革命、辛亥革命百周年記念論集編集委員会編『総合研究 辛亥革命』岩波書店、査読有、2012、257-276

川島真, 外務部の成立過程、樂景河・張俊義主編『近代中国：文化と外交』社会科学文献出版、査読無、2012、374-388

川島真, 上海におけるテレビ放送開始への経緯——中華人民共和国の初期電視事業の一例として——、三澤真美恵・川島真・佐藤

卓巳編著『電波・電影・電視 現代東アジアの連鎖するメディア』青弓社、査読無、2012、82-107

小熊旭・川島真、『大平学校』とは何か(1980年) 日中知的交流事業の紆余曲折、園田茂人編『日中関係史 1982 - 2012 社会・文化』東京大学出版会、査読有、2012、53-80

岡本隆司、尖閣・「反日」の史的構造、外交、査読無、16巻、2012、84-89

②岡本隆司、「主権」の形成 20世紀初頭の中国とチベット・モンゴル、比較地域大国論集、査読有、第7号、2012、18-30

③青山瑠妙、中国の広報文化戦略：そのプレゼンスと重い課題、三田評論、査読無、1159号、2012、28-34

④青山瑠妙、中国の戦略的チャンスは持続可能か、東亜、査読無、538号、2012、18-27

⑤KAWASHIMA Shin, The Development of the Debate Over "Hiding One's Talents and Biding One's Time" (taoguan yanghui): China's foreign-policy doctrine", *Asia-Pacific Review*, 査読有, Vol.18 No.2, 2011, 14-36

<http://www.tandfonline.com/doi/pdf/10.1080/13439006.2011.641751>

⑥青山瑠妙、中国「アジア一体化」の戦略と実像、現代中国、査読有、85号、2011、17-33

⑦川島真、未完の「近代」外交--中国の対外政策の通奏低音、現代中国、査読有、85号、2011、35-47

〔学会発表〕(計10件)

川島真、中国大陸の情勢と日中、台中関係「日台フォーラム」2013年東京会議、2013年12月5日、ザ・キャピトルホテル東急(東京都千代田区)

川島真、東アジアの歴史研究の方向と展望 歴史共同研究・歴史教育・歴史と社会、第四回東アジア日本研究フォーラム、2013年12月7・8日、HAEUNDAE GRAND HOTEL(釜山、韓国)

川島真、日中関係と国民感情 輿論と世論、第六回日中関係シンポジウム、2013年11月28日、中国人民外交学会国際会議庁(北京、中国)

川島真、第一次大戦後の日中関係と日本 ワシントン体制下の東アジア、日仏会館創立90周年記念シンポジウム「両大戦間における日中関係の新段階」、2013年10月5・6日、日仏会館(東京都渋谷区)

川島真、中国をとりまく「境界」と「国家」金門島と尖閣諸島を事例に、国際政治学会2013年度研究大会：トランスナショナル分科会「北東アジアをめぐる国家・地域主義・境界」2013年10月25日、朱鷺メッセ(新潟県新潟市)

川島真、日中関係における“市民”の両義

性、2013年度日本政治学会：C-2 市民社会は平和をもたらすか 両義性の観点から、2013年9月16日、北海学園大学(北海道札幌市)

川島真、記憶中の宗藩関係、第四屆“近代中外関係史”国際学術研討会(招待講演) 2012年11月10日、杭州海外海西溪賓館(広州、中国)

川島真、近代中国的型塑與『伝統』 以对冊封朝貢之解釈为中心、近代国家的型塑 中華民国建国一百年国際学術討論会、2012年9月13日、国史館(台北、台湾)

川島真、東アジア地域主義の現状と課題 中国の視線、日本政治学会、2011年10月9日、岡山大学(岡山県岡山市)

川島真、日中150年史のダイナミズム 憧憬・敵対・友好・競存、日本学術振興会・中国社会科学院主催：日中国交正常化40周年シンポジウム『グローバル化の中の社会変容 新しい東アジア像を形成するために』、2012年8月31日、中国社会科学院(北京、中国)

〔図書〕(計13件)

岡本隆司、近代中国史、筑摩書房、2013、283

岡本隆司編、中国経済史、名古屋大学出版会、2013、344

青山瑠妙、中国のアジア外交、東京大学出版会、2013、358

国分良成・添谷芳秀・高原明生・川島真、日中関係史、有斐閣、2013、286

劉傑・川島真編著、対立と共存の歴史認識 日中関係150年、東京大学出版会、2013、445

徐友漁・鈴木賢・遠藤乾・川島真・石井知章、文化大革命の遺制と闘う 徐友漁と中国のリベラリズム、社会評論社、2013、169

陳翠蓮・川島真・星名宏主編、跨域青年学者台湾史研究第五集、2013、606

川島真(田建国訳)、中国近代外交的形成、北京大学出版社、2012、574

川島真、近代国家への模索 1894-1925』(韓国語版) 三千里出版、2012、308

川島真・毛里和子、外交150年 グローバル中国への道程(韓国語版) ハンヌル出版、2012、308

三澤真美恵・川島真・佐藤卓巳編著、電波・電影・電視 現代東アジアの連鎖するメディア、青弓社、2012、371

岡本隆司、ラザフォード・オルコック 東アジアと大英帝国、ウェッジ、2012、247

岡本隆司、李鴻章、岩波書店、2011、224

〔その他〕

ホームページ等

川島真研究室

<http://www.kawashimashin.com/>

東アジア国際関係史研究会

[http://www.kawashimashin.com/?page\\_id=2485](http://www.kawashimashin.com/?page_id=2485)

中国近代外交史研究会

[http://www.kawashimashin.com/?page\\_id=1207](http://www.kawashimashin.com/?page_id=1207)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA, Shin)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：90301861

### (2)研究分担者

茂木 敏夫 (MOTEGI, Toshio)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：10239577

青山 瑠妙 (AOYAMA, Rumi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：20329022

岡本 隆司 (OKAMOTO, Takashi)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：70260742